

11) ヒト膀胱移行上皮癌における各種 growth factor の発現及び血液型抗原の減弱と予後の関連について

若月 俊二・富田 善彦	(新潟大学泌尿器科)
木村 元彦・今井 智之	
谷川 俊貴・佐藤昭太郎	
北村 康男・渡辺 学	(新潟県立がんセンター新潟病院)
小松原秀一・坂田安之輔	
中村 章・大沢 哲雄	(新潟市民病院)
高橋 英祐	
安藤 徹	(燕労災病院)
	(泌尿器科)
森下 英夫	(長岡赤十字病院)
	(泌尿器科)
平岩 三雄	(三条総合病院)
	(泌尿器科)

【対象と方法】種々の癌組織で、その malignant potential との相関が示されている epidermal growth factor receptor (EGFR), c-erbB2 product (B2P), transferrin receptor (TFR) の発現と膀胱移行上皮癌 (TCC) での予後因子として重要な ABH 抗原の減弱について、免疫組織染色を行い、それら4つのマーカーについて、予後との関連を検討した。

対象は、1987年10月から1992年1月の間に、当科及び新潟大学関連病院で、膀胱全摘術を受けた男性20例、女性10例で、その新鮮凍結切片標本に対し、各 growth factor 及び血液型抗原に対するモノクローナル抗体を使い、Streptoavidin peroxidase 法を用いた。結果判定は EGFR, B2P ではその陽性細胞の割合が25%以上、TFR では50%以上のものを増強例とし、ABH 抗原では50%以下を減弱例とした。

【結果と考察】平均観察期間は680日であった。再発死亡例は6例(男性4例、女性2例)であった。このうち、TFR 増強、ABH 抗原減弱は6例全例に認め、EGFR, TFR 増強例は5例であった。4種のマーカーのうち、異常が3項目未満であったものは13例、3項目以上であったものは17例で、再発死亡例は全て後者に含まれていた。このことより、growth factor あるいは ABH 抗原単独の検討よりも、これらを組み合わせて検討することで、より正確な予後判定が可能になると考えられた。

12) 上部尿路上皮腫瘍における EGFR (Epidermal Growth Factor Receptor) および c-erbB2 product の発現と続発性膀胱腫瘍発生との関係

今井 智之・富田 善彦	(新潟大学泌尿器科)
若月 俊二・谷川 俊貴	
木村 元彦・佐藤昭太郎	
北村 康男・渡辺 学	(新潟県立がんセンター新潟病院)
小松原秀一・坂田安之輔	
安藤 徹	(燕労災病院)
	(泌尿器科)
森下 英夫	(長岡赤十字病院)
	(泌尿器科)
平岩 三雄	(三条総合病院)
	(泌尿器科)

【目的】EGF は上皮細胞の分裂促進因子として働くことが知られており、そのリセプターである EGFR は各種の癌において発現の程度と進達度、分化度、予後などとの関係が検討されている。また c-erbB2 遺伝子は同様の増殖因子のレセプターをコードしており、その産物 e-erbB2 product は細胞分裂やトランスフォーメーションに関与することが知られている。腎尿管全摘後の続発性膀胱腫瘍の発生頻度は20~40%であるといわれ、EGFR や c-erbB2 product (B2P) の発現がこれらの発生を予想しうるかを検討した。

【対象および方法】腎盂または尿管腫瘍で腎尿管全摘除術をおこなった21例を対象とした。免疫組織学的検討は、凍結標本に対し、マウス抗ヒト EGFR モノクローナル抗体と、ウサギ抗ヒト c-erbB2 ポリクローナル抗体を用い Streptavidin biotin bridge technique にておこなった。結果の判定は、陽性細胞の割合が25%以上を増強とした。

【結果と考察】EGFR は9例で、B2P は9例で増強が認められた。続発性膀胱腫瘍が発生したのは21例中7例(33%)であり、統計学的に有意差は認めなかったものの、いずれかの発現が増強している13例中6例(46%)で再発をみたのに対し、いずれも増強していない8例中では1例のみ(12.5%)に再発を認めただけであった。また組織学的悪性度 (grade) や、stage と再発との間には一定の傾向を認めなかった。今後さらに症例数を重ねて検討する必要があると思われる。